

## 金曜コラム - 台湾の反韓感情と私たちの素顔

イ・ジョンウ(英国エジンバラ大学教授)

筆者は6月から今までずっと台湾にとどまっている。この国のスポーツ文化を見るのが今回の訪問の目的であり、過去3ヶ月余りの期間に多くのことを見て聞いて学んだ。新しい文化と接することはいつも楽しいことである。同時に、自然に感じられた自分自身の行動と態度を、他者の目で見えて反省することができる。これらの事柄の豊かさを後にして、何日か後に再び日常が待っている英国に戻ることを考えると惜しいだけだ。台湾のスポーツには反韓感情がある。普段台湾の人々は韓流によって韓国文化に対する好感を持っているが、唯一スポーツだけは韓国に対して感情が良くない。台湾人にとって韓国は必ず勝たなければならない相手であり、勝利した翌日には、その結果を朝刊で特筆大書で扱う。歴史的に韓国と台湾の間には特別な感情の溝が深いこともないのに、なぜ台湾は競技場で韓国に対するとそのように敵意をむき出しにするのだろうか？その理由を一方的にすべて納得することは難しいだろうが、その中を一度よく見てみると、今日、私たちの姿を一度振り返ってみる部分があることを悟るようになる。

なぜ台湾の人々は韓国チームに対すると雰囲気は過熱するのか直接聞いてみた。その答えとしてまず、韓国は過度に競争的だというものである。彼らは、韓国選手が試合での勝利そして大会の優勝にとっても執着するあまり、公正に真っ向勝負をするというより意地悪な作戦で相手を制圧しようとかかる場合が多いと見る。また、韓国の選手たちは審判の判決に疑問をよく示し、さらに判定に不服だとして強く抗議する事例が少なくないと言う。これらの主張の真偽をケースごといちいち検証して表わすのは難しいだろうが、それが事実かどうかを離れて台湾の人々の頭の中には、韓国選手たちが犯した厄介なプレイの固定観念が占めている。第二の理由として韓国の排他的なスポーツ民族主義を挙げる。国家対抗戦で自国の選手が勝利したときみなぎる愛国心は、ほとんどの人が普遍的に感じる感情だが、韓国の場合、それがおもてに出る程度があまりに攻撃的だということだ。韓国がスポーツを歴史のおよび政治的な事件の延長線から眺めるのも大きな問題だと言う。特にスポーツはスポーツであるだけなのに、韓国が日本との試合を過去の歴史に対する報復として認識することは程度が過ぎるとみる。試合に臨む積極的な態度は、アジアの国々の間に葛藤と不信を助長するだけであり、そのために韓国はギスギスした相手だというのが台湾の人々の考えだ。

第三は、試合に勝ったとき韓国チームは相手選手たちへの配慮がないと指摘する。台湾の野球ファンは韓国の選手たちが2006年のワールド・ベースボール・クラシック韓日戦と2008年北京オリンピックの決勝戦で勝利した後、マウンドに太極旗をさした行為を相手チームと開催国を無視する無礼として記憶している。同様に9月10日に日本で行われたU18青少年野球選手権大会で韓国が台湾に勝って優勝したとき、韓国の選手たちは水を撒くセレモニーをして空の水筒をマウンドに大量に投げた後に競技場を離れたことがある。これらの理由から台湾の人々は韓国チームはマナーがないと考えており、自国の選手が失礼な韓国選手団を打ち破ったとき、妙な快感を感じるという。

台湾人のスポーツ反韓感情、そしてその3つの原因。もし韓国側でこれをすべて説明しようとしたら、多少不当だと感じる部分もあるだろう。事実、客観的な指標で韓国のスポーツは、ほぼすべての種目で台湾より優秀な成績を収めているので、台湾の反韓感情について韓国はさほど意に介さず、さらにこれにいちいち気

を使わなければならない事もないだろう。しかし、その原因を吟味してみると、まずそれらが果たして、特定の国への反感につながるだけ大きいことかと疑問がありながらも、同時に台湾の反韓感情というのが成果主義と国家主義に彩られた韓国スポーツの素顔をそのまま映している鏡という帰結に至ることもある。考えれば考えるほど、後者の方により多くの重さが行くのは単に私だけだろうか？

2018年9月14日

## 01 ニューシス 2018.9.9

### 【 来年の国体マラソンは北朝鮮開城を出発することができるか 】

ソウル市は来年10月に開催される第100回全国体育大会を控えて、閉会式といくつかの試合を北朝鮮で行なう案を議論しています。マラソンの場合、出発点を北朝鮮開城市に定める案が議論されています。

ソウル市が最近公開した「第100回全国体育大会及び第39回全国障害者体育大会の基本計画（案）」によると、100回国体は来年10月4日から10日までの1週間行われます。

市は開会式をソウル（蚕室主競技場）で、閉会式を平壤（ピョンヤン綾羅島スタジアム）で行う案を構想中です。市は平壤競技場と宿泊施設の現況を考慮し、平壤で行なう競技種目も選定する方針です。

サッカーやマラソンなど南北和合・平和の象徴性がある競技の分散開催が優先推進されます。マラソンは開城市（出発）→板門店→臨津江→統一展望台→坡州市（到着）を通る区間が上げられます。サッカーの試合はソウル・平壤で分けて行われます。

市は聖火リレーのギョンピョン応援団の構成などにより、南北和合の国体雰囲気を作成する方針です。

（訳注：ギョンは京城の京でソウルのこと、ピョンは平城の平でピョンヤンのこと）

聖火リレーの場合、北側聖火と韓国側聖火を板門店で合火した後、主競技場に安置する方式が検討されています。またギョンピョン応援団を組織してソウル市民は平壤選手団を、平壤市民はソウル選手団を応援する案が議論されます。

北側選手団が国体に参加するかどうかをめぐっては、南北の市・道全体が参加する場合、平壤市だけ参加する場合、一部の競技に北側選手団を招請する場合などがすべて考慮されています。

市は今年下半期中にソウル・平壤南北共同開催包括合意文の作成を終えて、南北共同開催実務協議を行う予定です。

市は「100周年を続けてきた民族体育大会を契機に韓民族の団結と和合を図りたい」とし「体育大会を大会前・後の南北スポーツ交流の新しい転機として活用する」と明らかにしました。

朴ウォンスンソウル市長も去る5日「見える未来コンファレンス2018」の基調講演で、「国体が民族の和解と平和、統一に貢献する大きなきっかけになることができるようによく準備する」とし「和解と平和の象徴性がある種目の競技を一緒に開催したり、北朝鮮が参加できるさまざまな方法を模索している」と明らかにしています。

<https://sports.news.naver.com/general/news/read.nhn?oid=003&aid=0008797629>

## 02 毎日経済 2018.9.10 【 アジア大会を眺める少し異なる視線 】

去る2日、2018ジャカルタ・パレンバン夏季アジア大会が3週間の熱戦を後にして閉幕しました。45カ国

が参加した今回の大会で大韓民国は金メダル 49 個、銀メダル 58 個、銅メダル 72 個を獲得し、金メダル合計基準で中国、日本に次いで総合順位 3 位を記録しました。24 年ぶりにアジア 2 位の座を日本に渡したもののアジア 45 カ国の中で 3 位、これぐらいなら優秀な成績です。

以前より芳しくない成績にもかかわらず、今回のアジア大会への関心が以前の大会に比べてなかったわけはありません。むしろ 4 年前の仁川アジア競技大会ほどに、それ以上に、オンライン空間でとても広く知られたし、これは今でも進行形です。

しかし、内面を見てみると物足りなさが多く残っています。まずアジア大会のニュースを含むコンテンツのほとんどがサッカーと野球に関するものです。野球チームの特定の選手たちと関連した兵役の問題、ワールドクラスで脚光を浴びるソン・フンミンのワイルドカード出場、野球、サッカー、すべて弱いチームから受けた思わぬ敗北など、次々と強力な問題が大会前から量産されました。

もちろん国内のスポーツの構造を考えると、これは特別な、または奇妙なことではありません。しかし、以前の大会と比べてみても特に今回の大会がひどかったのは事実です。このように特定の種目、それも最も人気のある種目で大きな話題が続けて噴出したので他の多くの事が埋もれてしまうことになり、残りの 38 種目はごく一部を除いて疎外されたまま脇役に立つ形になりました。

では、なぜこのような状況になったのだろうか？本当に野球やサッカーなどの特定の種目の過度な関心と問題量産のせいで他の種目が一方的に被害を受けたのだろうか？これに対する論議は明らかであり、実際にそうだったのか確認するために客観的な確認が必要になります。

しかし、完全に特定の種目への関心偏重が他の種目への関心を萎縮させたと見ることはできないようです。考えてみれば、私たちはかなり古くからアジア大会のような総合競技大会にますます興味を失っていました。これは単にアジア大会だけではありません。全世界人の祭りと言えるオリンピックも同様です。1986 アジア大会と 1988 オリンピックを頂点に、20 世紀の韓国はオリンピックとアジア大会に熱狂しました。スポーツを通じた国威宣揚は国民の愛国心を鼓吹させ、社会統合と共同体意識を高揚するために明らかに大きく貢献しました。

いくつかの人気種目を除く、いわゆる不人気種目の選手たちの善戦はアジア大会が開かれたとき大きな関心を集め、それはアジア大会などの国際総合競技大会が与える一つの重要な機能でした。しかし、今の国民は、そのようなことに以前ほどの感動を受けることも熱狂もしません。

過去にはアジア大会のメダル、特に金メダルを取ることは非常に希少価値の高いものでした。いわゆる誰もできないことであり、それこそ「家門の栄光」でした。1986 ソウルアジア大会前までは韓国選手団が獲得した金メダルの数は、以前の 8 つの大会をすべて合わせて 100 個でした。しかし、1986 年の大会だけで 93 個の金メダルをもたらした、後の大会でも以前とは比較できない金メダルがあふれました。範囲を銀・銅メダルに広げると、その数はさらに多くなります。

もちろんメダルをとること、それもアジアでトップの座に上がるのはあまりにも大変なことであり、限りなく拍手に値することです。選手たちの汗と努力が絶対卑下されてはなりません。ただし母数が大きくなるに従って、より多くのメダルがすぐに名声と人気を保証しないのは明らかな事実です。

さらに 21 世紀に入って人も社会も急激に変化しました。より個人化され、細分化されました。自分の好きなものが明らかになり、主観が明確になりました。多くの人にはもはや愛国心だけで応援し、興奮しません。価値も変わりました。人々は結果と同じくらいプロセスについて重要視し、公正でない報奨に対して声を大にします。

いわば世界が変わったのです。変わった世の中に適応するために、新しい流れを理解する必要があり、その中で新たな発展方向を見つけるために努力しなければなりません。すべての分野が同じであり、スポーツ界も例外ではありません。

<https://sports.news.naver.com/general/news/read.nhn?oid=009&aid=0004216057>

### 03 日刊スポーツ 2018.9.13 【 ジョン・ヨン Chol 教授 “公平性があっても特恵は特恵” 】

"国威宣揚"フレームから脱しなければならない。

公平性があっても特恵は特恵です。ジョン・ヨン Chol 西江大教育大学院教授が国威宣揚フレームに向けた視角の変化が必要であると見ている理由です。スポーツ分野の兵役特例問題が相対的に注目されて唯一浮き彫りになっているとします。むしろ文化・芸術分野の問題は、これに包まれているということです。種目と選手への過度の批判ではなく、特例を適用する正当性に注目しなければならないとしました。そして兵役義務を果たさなければならないと主張しました。方式と期間に柔軟性を置いてもという話です。基本的立場は「特例は最小限に抑えなければならない」ということです。

- アジア大会後の爆風が激しい。原因は何だと思うか。

「若い世代で兵役特例制度を見る視点が変わった。公正がひととき強調されている世相だ。スポーツの分野でひととき強調される単語が毀損されている現実に声を出さだろう。平昌五輪から始まった。アジア大会ではサッカーと野球が相互に比較され、より増幅された。」

- 特定の種目と選手に集中した非難に対して過度だという立場を伝えた。

「二種目とも選定過程で議論が起きた。しかし、大会を行って野球はより多くの非難を浴びた。二つの理由だと思う。野球代表チームは「小学生の腕をひねって得た金メダルである」という認識が生じた。比較的勝負が容易な相手だけにあつたという認識からである。兵役特例まで与えられた状況が適切でないと見たのだが、他の国が最高の選手団を構成していないという理由で非難してはいけない。結果も保証されたものではなかった。もう一つ取り上げたいのは野球という競技に向けた認識だ。」

- 具体的に言うと？

「野球ファンではない人は” 楽なスポーツではないか” と考える。苦しんでいるのが目に見えるサッカーとは違う。表面的に選手たちの努力が目立たない傾向がある。そのような種目があまりにも大きな利益を得るとい認識が兵役特例に関する議論になって増幅されたとみる。ただし、練習の過程で流した汗はどの種目でも多い。過剰な非難は不適切であると思う。」

- 選手はどうか。

「同じだ。金メダルを首にかけることもできず頭を下げたまま、罪人のように空港を抜けていくシーンを見て、いろいろ思った。不法を犯したのではない。作られたルールの中で実現したものである。実際に運動選手より文化・芸術分野の特技者がより多くの特恵を受けている。知られていないコンクールでも免除の恩恵を受ける人が出ている。各種目の運動選手の全体人数を考慮すれば、ごく少数だけが恩恵を受ける。注目される分野だからと、より多くの非難を受けなければならないのか。公正が話題であれば、もう一度考えなければならない問題だ。もちろん呉智煥 (LG) の場合はけしからんという認識はする。しかし、非難と呪いはやめなければならないと思う。」

- KBO、コーチングスタッフの選択と運営も問題に上がった。

「KBO よりソン・ドンヨル監督の問題だ。ホ・ジェ、バスケットボールチーム監督も同じだ。責任感が足りなかった。金ハクボム、サッカー代表チーム監督は、選手選考の過程で浮き彫りになった議論に対応した。

『ホァン・イジョの選抜は義理が作用したのではない』との話しだ。実際立証もされた。しかし、呉ジファンやホ・ジェ監督の二人の息子は抜擢と同時に議論がされたにもかかわらず一貫して沈黙している。指導者としての立場を表明する必要があった。その点が大衆の怒りを増幅させたと見る。まず公正な選抜が行われなければならない、論争になったら明確な説明が必要だ。卑怯だ。」

- 「マイレージ制度」の導入など、兵役法改正に向けた動きがある。

「マイレージ制度は難しいだろう。種目別状況がまちまちであるため、公平性に合った基準を作り出すのが容易ではない。むしろ、現在の制度がよりきれいである。明確な基準を立てて代案を作らなければならない。そして、その内容を説得する過程も重要である。これまでスポーツ界はこの点が不十分だった。積弊や矛盾を解決するプロセスが正常に動作していなかったのだ。」

- 望ましい方向は何だと思うか。

「一度、国威というフレーム自体の認識が変わらなければならない。兵役特例法が初めて出てきた 1970 年代と状況が違う。いまだにそのフレームを前に出して特恵を容認する事はもう一度考えなければならない問題だ。実際に、以前にも改善を叫ぶ声と動きがあった。変化は微々たるものだった。公平性を前面に出しても、最終的に特恵は特恵だ。最小化しなければならない。「大衆歌手も国威宣揚をしたので適用しなければならない」という主張は、論点を曇らせ論争を大きくするものだ。全盛期を越えた時点でも兵役義務を果たすことが望ましい。その時期に戦闘要員に投入することができないなら、技術を活かして各分野の教育要員として社会に貢献しなければならない。」

<https://sports.news.naver.com/general/news/read.nhn?oid=241&aid=0002829538>

## INFOMATION

体育市民連帯 ソウル市 瑞草区 瑞草洞 1485-3 スンジョンビル 305 号

체육시민연대 서울시 서초구 서초동 1485-3 승정빌딩 305 호

Tel : 02-2279-8999、E-mail : [sports-cm@hanmail.net](mailto:sports-cm@hanmail.net)

ホームページ : <http://www.sportscm.org/>

日本語訳 : 佐藤好行 新日本スポーツ連盟 国際活動局 韓国担当 [jr1fgep@jarl.com](mailto:jr1fgep@jarl.com)